

ピエール・マビユーという「掘り出し物」 —ブルトンのハイチ講演をめぐって—

有馬 麻理亜

はじめに

本稿では、1930年代後半にシュルレアリスム運動に参加し始めた医師、ピエール・マビユー（1904-1954）の重要性を再発見する過程を記したものである。そもそもマビユーとはどのような人物であったのか。シュルレアリスム研究者ジャクリーヌ・シェニウ＝ジャンドロンのによるマビユーの紹介は、一般的に流布しているマビユーのイメージを的確に示している。

30年代を通じて、シュルレアリスムのもっとも驚くべき「新入り」の一人が、広大な教養を持つ医師ピエール・マビユーである。ただ、彼はグループのメンバーというよりもむしろブルトンの友人である。彼の奇妙な作品群は、生物学と心理学のいくぶん目的論的な統合であり、それらはここ数年の間に出版されている〔…〕。とはいえ、彼の最も美しい本は、「人間解放の手段」と捉えられた驚異的なテキストのアンソロジー〔…〕、『驚異の鏡』（1940）である¹。

マビユーについては、アンドレ・ブルトンの娘オーブの出産に立ち会っただけではなく、他のシュルレアリストに対して治療を行うなど、医師や友人としてのエピソードに事欠かない。他方でマビユーの神秘哲学への造詣の深さが、戦後になってシュルレアリスムが秘教への関心を名言したことと関連して論じられることもある。マビユーが関心を抱いた「驚異 le merveilleux」という概念はまた、『シュルレアリスム宣言』（1924）において「超現実」と並んで重要なものであった。そのため、ブルトンにおける「驚異」と比較されることも多い²。何よりシェニウ＝ジャンドロンの「最も美しい本」と形容するように「マビユー＝驚異」というイメージが強いことは、日本において出版されたマビユーの単著のうち邦訳があるのが『驚異の鏡』だけであることから裏付けられる³。『驚異の鏡』日本語訳のあとがきにおいて、山中散生は1938年から1940年までマビユーと文通をして、作品を贈呈されたと告白しているが、残念ながら彼の人となりや、交流の内容については記していない。むしろ山中の紹介は簡素なもので（「ピエール・マビユーの経歴や業績については、一般にあまりよく知られていないようである。記録によると、彼は医学者

で、一九三五年ごろパリのシュルレアリスト・グループに参加し、一九五二年に永眠している)、この「記録によると」という表現からしても両者が特別親しい関係であったかどうかは不明である⁴。山中はマビエユが意図的にシュルレアリスムに寄りそうような論を書くことが少なかったと指摘するとともに、マビエユの神秘思想や魔術に対する愛着が戦後のシュルレアリスムの活動にとって「貴重な合鍵」になるだろうと述べている。このような指摘からも、意図的かどうかに関係なく、グループと距離を取りつつ独自の探求を進めていたマビエユのイメージや、シュルレアリスムに対する彼の貢献が神秘哲学や魔術といった分野であることが強調されている。

フランスにおけるマビエユに関する先行研究は多くない。現在もなおレミー・ラヴィエユの博士論文（1983年に出版）が最も重要な文献の一つである⁵。ラヴィエユはマビエユの二人目の妻ジャンヌと直接交流しながら、マビエユの草稿やメモなど重要な資料に基づく伝記的事実を網羅した。ただし、彼の論文は作品そのものやマビエユの思想を体系的に分析したものとは言い難い。もちろん他にも重要な研究論文は数編あるが、全体としてはマビエユをシュルレアリスム周辺の人物として取り上げるものや、「マビエユ＝『驚異の鏡』の著者」というイメージを踏襲するものが多いと思われる。

筆者が彼の重要性に気づき、今後マビエユ研究を進めたいと考えるに至ったのは、先に挙げた典型的なマビエユ像とは異なる、別の側面を見出したからである。この短い研究ノートでは、今まで進めてきたブルトン研究を通じてマビエユを見出すことになった過程を記すとともに、この過程がブルトン研究においても少なからず重要な仮説として機能することを示したい。

1. ブルトンによるハイチ連続講演とピエール・マビエユ

マビエユの名が浮上したのは、ブルトンが1945年12月から翌年2月まで滞在した、ハイチでの連続講演を分析した時である。講演内容についてはすでに別のところで論じたので⁶、この滞在にまつわる重要な点のみを挙げておく。そもそもブルトンを招聘したのは、在ハイチフランス大使館の文化担当官であったマビエユであった。しかし、ブルトンの滞在に合致するようにクーデターが発生し、レスコー大統領が失脚、軍事政権が生まれてしまう。二人がこのクーデターに影響を与えたかのような言説も飛び交うなかで、ブルトンは急遽亡命先のアメリカへ戻り、マビエユも解職されてしまう。その他、このハイチ滞在を通じて、ブルトンはブドゥの実践を知ることになるのだが、それを可能にしたのもまたマビエユであったという逸話がある⁷。

第三回目の講演原稿はブルトン思想における社会思想と秘教との関係を明らかにするための鍵となるテキストであり、この講演でブルトンはエリファス・レヴィやフォーリエを例

として、社会変革の情熱を持つ者は最終的に秘教へと接近していくという精神の発展モデルを提示した。この主張を学術的に支えたのが、神秘学と文学の関係を論じたオーギュスト・ヴィアットの『ヴィクトル・ユゴーとその時代のイリュミネたち *Victor Hugo et les illuminés de son temps*』（1942）とロマン主義と社会主義思想の関係を論じたロジェ・ピカールの『社会ロマン主義 *Romantisme social*』（1944）であった。特にピカールの書籍は頻繁に引用されており（時には引用符すらない）、この講演に対する強い影響があったことを物語っている。しかし、いかにしてブルトンがこれらの研究を知ったのか。以前発表した論文では、特に出版してまもないピカールの書籍をブルトンがどのように知ることとなったのかを明らかにすることができなかった。そこで改めて、この三人が当時北米にいたことを足がかりに調査した。

2. 北米における亡命知識人の人間関係

オーギュスト・ヴィアット（1901-1993）は、スイスのジュラに生まれ、1928年にソルボンヌ大学で博士号を取得する。この博士論文『ロマン主義の隠された源流 *Les sources occultes du romantisme*』はオカルトと文学を結びつける先駆的な研究として知られている。1925-27年と1929-1930年にニューヨークのハンターカレッジで教員として勤務し、1932年にフランス国籍を取得。再びハンターカレッジで勤務した後、33年以降ケベックに活動拠点を移し、ラヴァル大学で勤務しながらハンターカレッジにおいても継続的に講義を担当していたようだ⁸。彼の作品である『ヴィクトル・ユゴーとその時代のイリュミネたち』は、ハイチ講演だけではなく、『秘法十七』（1944年、「透し彫り」を加えた版は1947年）の中においても参照されている。ブルトン研究者であるスザンヌ・ラミーは、ブルトンがカナダに滞在している時に『秘法十七』が執筆された事実に着目し、ヴィアットに書簡を送り、ブルトンとの関係を訊ねている。ヴィアットはブルトンとは一度も面識がなかったと断言し、彼と同じくニューヨークに亡命していたレヴィ＝ストロースからブルトンが自分に会いたがっていたが実現しなかったという返事を送っている⁹。ファブリス・フラユテスによれば、ブルトンはヴィアットによるユゴーの『海に働く人々』（1866）の分析をよく知っており、1942年にはマッソンが『海に働く人々』の挿絵を描いたという¹⁰。ヴィアットとレヴィ＝ストロースに親交があったことから、亡命知識人の間でブルトンがヴィアットの名を聞き、研究に関心を抱いた可能性は高い。

一方、ロジェ・ピカール（1884-1950）はパリ大学法学部教授であった。彼は情熱的な社会主義思想を持っていたようで、エコール・ノルマル出身者による若者の社会主義グループや旧フランス社会党（SFIO）に属し、『社会主義誌 *Revue socialiste*』の編集長も務めた。しかし1940年ユダヤ人であったことで大学での職を罷免されてしまう。その後

ロックフェラー財団の招待により、アメリカ合衆国に亡命し、ニュースクール（The New School for Social Research）でポストを得て、他のフランス出身の亡命者と同じく高等研究自由学院（École Libre des Hautes Études）の設立に関わった。ここでもポストを得ようとしたが、極度の反ド・ゴール主義のために41年に追放されることになる¹¹。サンジェールはピカールを「知っている限り、合衆国に移住したユダヤ系大学人のなかで、公然と長い間ド・ゴール将軍に反対した唯一の人物である」と評しており、ド・ゴールの正当性を常に批判するピカールを他のフランス亡命知識人が良く思っていなかったことや、合衆国のフランス人コミュニティから追放されたつらさから、解放後もフランスに戻らなかったと指摘している¹²。追放後はブレントノーから書籍を出版したり、アリアンス・フランセーズの援助によってカナダで講演活動をしていた。

このカナダにおける活動がピカールとヴィアットを接近させたのかもしれない。ヴィアットの日誌には、追放された翌年の1942年以降、ピカールの名が頻繁に現れるようになる¹³。思想的に一致しているか、信頼できる友人であったかは分からないが、ヴィアットとピカールは何度も会い、書簡を交わしている。ヴィアットは時にはピカールの出版の援助を頼まれたり、彼の講演を評価したりしていたようだ¹⁴。

3. ヴィアットとマビーユ

驚くことに、このヴィアットの日誌にはマビーユの名前も登場している。最初にマビーユの名が認められるのは、彼が文化担当官になる前の1944年1月6日の日記である。合衆国におけるフランス文化担当官であるアンリ・セリグと昼食を共にした内容で、「マビーユは、ハイチに帰ってきて、彼 [=セリグ] にル・グアーズ大司教とアルマン医師の「ヴィシー派の姿勢 vichysme」について話したそうだ」という文が添えられている¹⁵。この文面からは、たとえ直接面識がなかったとしても、この時点で少なくともヴィアットがマビーユの存在を知っていたと思わせる。実際、ヴィアットは1943年から45年の間、ポルトーフランス大学で夏期講義を行っている。マビーユもまた、1941年以降、文化担当官に指名されるまでの間、主にハイチで医師として活動している¹⁶。マビーユはレスコー大統領の息子と親しくしていたこともあり、このようなハイチにおける人間関係から考慮しても、マビーユとヴィアットが何らかの機会にハイチで顔を合わせた可能性は高い。いずれにせよ、この日付を境としてマビーユの名はヴィアットの日誌に数回現れることになる。1945年6月20日には、ニューヨークでマビーユと昼食を共にしたことが記録されている。

一方、ラヴィーユの論文には、1945年の夏マビーユがヴィアットと Devereux という名のアメリカ人とともにハイチのジェレミーを訪れたと記載されている。さらに滞在中、

ヴィアットがヴァレリーについて、マビーユはサン＝テグジュペリについて講演をしたという¹⁷。しかしながら、ヴィアットの日記には Devereux という名が一度も記されていない。しかも、実際にサン＝テグジュペリに会い、この作家に関する論考を発表していたのはむしろヴィアットであった。したがってラヴィーユの指摘は必ずしも正確であるとは言えない。それでも 1945 年の日記には、夏が近づくにつれてハイチ行きに関する記述が見られることから、少なくともヴィアットとマビーユがこの夏ハイチで共に過ごした可能性は残されている。同年の冬にブルトンがハイチに到着することを考えると、驚くべきタイミングの良さである。補足すると、マビーユがクーデター後の新政権によって担当官の職を解任された時、ヴィアットはマビーユに対して（政変に巻き込まれた被害者として）同情的であり、むしろブルトンの不用意さを責めるような書簡を送っている¹⁸。このような事実からもいっそう彼がマビーユの人となりを知っていたと思わせる。このようにヴィアット、ピカール、マビーユ、この三者はハイチ講演の舞台裏でそれぞれ繋がっていたのである。

4. マビーユ、「大いに信頼できる助言者 *homme de grand conseil*」

そこで一つの仮説が浮上する。ブルトンがピカールの著作を知ったのは、ヴィアットとマビーユの親交によるもの、あるいはマビーユから何らかの情報を得たからではないだろうか。そうであるならば、この講演内容や主題そのものについても、マビーユの影響を再検討すべきではないか。この仮説を裏付ける要素もある。第一に、ピカールの研究は講演で何度も引用されているが、それ以外でブルトンがピカールに関する言及をしたことは一度もない（ブルトンが彼の書籍を所持していたことは確かだが¹⁹）。また、原稿管理に関しても奇妙な事件が起こっている。初回の『レックス』劇場でのスピーチを別として数えると、第一回と第五回の講演原稿（ブルトンのプレイヤード版全集の注によればタイプ原稿）がマビーユの元にあった²⁰。そのため 1981 年にプラスマ出版から刊行された『夜の横断 *Traversées de Nuit*』には、マビーユの講演として原稿が収録されてしまったのだ。プレイヤード版は誤りに比重を置いた文脈でこの事実を紹介し、ラヴィーユはブルトンがハイチ滞在中マビーユの家に行ったことや、政変による混乱のため原稿が混じったのではないかと推測している²¹。さらに興味深いことに、1945 年 10 月 23 日付のマビーユ宛ての書簡の中で、ブルトンは「この講演のために手伝ってくれないか。まだ準備ができていないのだ。何を準備しておけばいいだろうか」とマビーユに助けを求めている²²。助言という形であれ、滞在中の会話という形であれ、マビーユが講演準備を何らかの形で手伝った可能性がある。『驚異の鏡』再版時（1962 年）ブルトンが記した序文「跳ね橋」において、彼がマビーユを「大いに信頼できる助言者 *homme de grand conseil*」と呼んだよう

に²³、マビーユがブルトンにインスピレーションを与えた可能性が十分に考えられるのだ。

この仮説の裏付けとして、亡命知識人のイデオロギーもまた、見逃すことができない要素である。ロワイエによれば、ブルトンは当時アメリカ社会における問題を避けるために、政治的・宗教的問題を正面から取り上げようとはしなかった。その例として、ロワイエは1942年の雑誌 VVV 第1号にむけてマビーユが準備した「あまりに政治的なテキスト」が採用されなかったことを挙げている²⁴。ハイチの暴動に関しても、ブルトンは自分の登場によって結果的にクーデターが起こったという誤解を解こうとして、サン＝ジョン・ペルスに手紙を書いている²⁵。このような事実を考慮すると、亡命中のブルトンがいかに政治活動に慎重であったかが分かる。マビーユの政治的過激さを危惧するブルトンが、果たして反ド・ゴール主義を表明したために、フランス人亡命者から排除されていたピカールの著書をこれほど熱心に取り上げようとするだろうか。むしろ、神秘学や文学に造詣があり、ピカールが追放されたのとはほぼ同時期に「あまりに政治的なテキスト」を準備していたマビーユの方がピカールの作品に興味を抱いたと考える方が腑に落ちるのだ。

ただし参照可能なマビーユの書簡を所蔵するジャック・ドゥーセ文学図書館で確認した限り、ヴィアットからの書簡は確認できなかった。今後は、ヴィアットが受け取った書簡を探すことが必要となるだろうが、この仮説を完全に証明することは現時点では難しい。しかしこの仮説によって、いわゆる「マビーユのシュルレアリスムへの貢献度は、どちらかと言えば、彼の思想のバックボーンとも言える神秘哲学が、ブルトン理論に内蔵されている新しい神話、いわばプロメテウスの神秘思想に照応して、側面的にこれをささえる役割を果たしたことであろう」²⁶といった、適切ではあるものの、あまりに型にはまったマビーユ受容に新たな視点もたらすことができるのではないだろうか。また、講演内容や主題選択などにマビーユの影響があるとすれば、双方の研究にとって新たな可能性が生まれるのだ。

結論にかえて ― 先行研究、資料収集の状況と今後の研究方針

このような理由で、現在は政治的・歴史的文脈におけるマビーユの重要性に着目することとなり、資料や先行研究を分析している。そこで本研究ノートでは、結論にかえて興味深い資料の紹介と今後の研究方針を紹介しておきたい。マビーユの政治的イデオロギーがいかなるものであったのかを調査する過程で、30年代後半に彼が政治的な雑誌に発表したテキストを現在分析している。特に二つの雑誌（新聞に近い）が入手できた。一つは1936年から翌年にかけて、マビーユが関与した *La Flèche de Paris* という雑誌である。これは人民戦線系のグループ、対ファシズム統一戦線 *Front commun contre le fascisme*

のガストン・ベルジュリー Gaston Bergery が立ち上げたもので、ベルジュリーが次第にペタンへと接近していくためなのか、マビーユは一年ほどで彼らと交流を持たなくなる。マビーユのテキストは多種多様で、「ルーベンスとその時代」「詩は立って読まれる」といった文芸批評的なものもある一方で、各社会階級における「娯楽の合理的組織」に関するものや、「大衆の観光を生まれさせること」と題されたテキストがある。これらは医師として、あるいは自然を愛したマビーユの社会に対する考え方を検討するために重要なテキストである。もう一つは 1939 年 1 月から 7 月までしか継続されなかった *Ultimatum de la Conscience française* という雑誌である。レヴィーユによれば、これは « Le Maximisme » という、あまり情報のないマイナーなグループによる雑誌であり、レオン・ブルム政権の失敗によって生まれた小集団である可能性が高い²⁷。この雑誌には「革命的意識」、「前進する革命」といった題のテキストがみられ、よりイデオロギー色が強い。ブルトンが 1936 年に人民戦線の挫折を考慮してバタイユとともにファシズムに対する共同戦線としての「コントロール＝アタック」を結成した時、マビーユが参加していないことを思い返すと、これらの活動を分析することで、今後シュルレアリスムのグループにとらわれない、マビーユ自身の政治思想を垣間見ることができると考えられる。

最後に、マビーユが生涯を通じて医学研究を続けていたことはもっと評価されるべきである。『驚異の鏡』以外の彼の代表作である、『人間の構造』(1936)、『エグレゴールと文明の生』(1938)、『人間知への入門』(1949)、などは、当時彼が関心を持っていた科学的知識（形態論、類型論、心理学、数学など）を導入した壮大な文明論である。また、さらに彼が死ぬまで没頭する「村のテスト」といった心理実験もまた、彼の世界観と科学の結晶であると思われる。むしろ神秘哲学はこれらのマビーユの知識の一部として再検討すべきかもしれない。次の機会には、そのような科学者として、また医師として社会活動に参加していくマビーユの側面に関する研究を発表したいと思う。

※ 本研究は平成 26-28 年度の科学研究費（課題番号：26370375）の助成を一部含む。引用は既訳を参照しながら引用者が訳した。原文のイタリックには傍点を付している。引用の下線は引用者による。なお執筆者の論文については、氏名を省略した。

注

1. Jacqueline Chénieux-Gendron, *Le surréalisme*, PUF, 1984, p. 104（星埜守之、鈴木雅雄訳『シュルレアリスム』、人文書院、1997 年、p. 128）。

2. 鈴木雅雄はマビーユの思想を解明するキーワードとして、「驚異的なもの」と「エグレゴール」を挙げている。鈴木雅雄「聖女にバラの花束を——ピエール・マビーユ試論——」、『早稲田フランス語フランス文学論集』、第5号、1998年、pp. 175-187.
3. その他、「夢の場面について」という短いテキストがブルトンによって収集されたアンソロジーのなかに収録されており、邦訳も出版されている。山中散生他訳『夢の軌跡』、国文社、1970年、pp. 106-110.
4. ピエール・マビーユ著、山中散生他訳『驚異の鏡』、国文社、1972年、pp. 429-432.
5. Remy Laville, *Pierre Mabille : Un compagnon du surréalisme*, Faculté des Lettres et Sciences humaines de l'Université de Clermont-Ferrand II, 1983. マビーユの伝記的事項に関しては主にこの書籍を参考にした。
6. 講演内容の分析については次の拙論を参照のこと。『『社会主義の夢 rêve du socialisme』：戦後におけるブルトンの文芸批評とロマン主義再興』、『近畿大学教養・外国語教育センター紀要（外国語編）』、6巻（1）、2015年、pp. 1-17.
7. この事件に関する文献は多いので、邦訳のあるものを挙げておく。アンリ・ベアール著、塚原史、谷昌親訳『アンドレ・ブルトン伝』、思潮社、1997年。
8. ヴィアットに関する主要参考文献は次のとおり。Auguste Viatte, *D'un monde à l'autre. Journal d'un intellectuel jurassien au Québec (1939-1949)*, édité et présenté par Claude Hauser, volume 1 [mars 1939-novembre 1942], L'Harmattan, 2001 ; volume 2 [novembre 1942-août 1945], 2004 (以後 *D'un monde à l'autre* と略し頁数を付す)。Auguste Viatte (1901-1993), *Facettes d'une vie, facettes d'une œuvre*, Office du patrimoine et de la culture, Porrentruy, 2001. 室淳介「オーギュスト・ヴィアット著『ロマンティズムの神秘学的源流・天啓説-接神論1770年-1820年』、ヨーロッパ文学研究、17号、早稲田大学文学部ヨーロッパ文学研究会、1969年、pp. 145-150. 今野喜和人著『啓蒙の世紀の神秘思想 サン＝マルタンとその時代』、東京大学出版会、2006年、p. 21.
9. Suzanne Lamy, *André Breton. Hermétisme et Poésie dans Arcane 17*, Les Presses de l'Université de Montréal, 1977, pp. 146-147.
10. Cf. Fabrice Flahutez, *Nouveau monde et nouveau mythe. Mutation du surréalisme de l'exil américain à « Écart absolu » (1941-1965)*, Les Presses du réel, 2007, pp. 150-151.
11. ピカールの伝記的事実に関しては、主に次の文献を参照した。Robert Mossé, « Roger Picard 1884-1950 », *Revue d'histoire économique et sociale*, n°31, 1953, pp. 5-12, rééditée par Slatkine Reprints, 1983. Emmanuel Loyer, *Paris à New York*.

- Intellectuels et artistes français en exil 1940-1947*, Hachette Littératures, coll. « Pluriel », 2007. Claude Singer, *Vichy, l'Université et les juifs. Les silences et la mémoire*, Les Belles Lettres, 1992. Silvia Falconieri, « Le “droit de la race”. Apprendre l'antisémitisme à la Faculté de droit de Paris (1940-1944) », *Clio@Themis. Revue électronique d'histoire du droit*, n°7, mars 2014 (CNRS や法学研究者による電子雑誌、<http://www.cliothemis.com/Le-droit-de-la-race-Apprendre-l>). なお、ブルトンのプレイヤード版全集ではピカールは法律家 juriste として紹介される程度であり、『社会ロマン主義』の影響の強さは指摘されるものの、書籍に関しては「おそらくブルトンはこの本を読み、ハイチに持って行き、講演に使った」という説明のみに留まっている。Cf. André Breton, *Œuvres complètes* (以下 OC), tome III, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1999, p. 1230 et p. 1234.
12. Claude Singer, *op.cit.*, pp. 304-305.
 13. *D'un monde à l'autre*, tome I, p. 458.
 14. 日誌にはピカールがユダヤ人なのだろうかと自問する部分や、ピカールと彼の妻の反ド・ゴールの態度に皮肉を述べている部分など、さまざまな挿話が見られる。Cf. *D'un monde à l'autre*, tome I, p. 485, tome II, p. 207, et passim.
 15. *D'un monde à l'autre*, tome II, p. 138.
 16. Cf. Auguste Viatte (1901-1993), *Facettes d'une vie, facettes d'une œuvre, op.cit.*, p. 28, pp. 32-35. Remy Laville, *Op.cit.*, pp. 39-61.
 17. *Ibid.*, p. 56.
 18. Sophie Leclercq, *La rançon du colonialisme. Les surréalistes aux mythes de la France coloniale (1919-1962)*, Les presses du réel, 2010, p. 301.
 19. 次のサイトで確認できる。 <http://www.andrebretton.fr>
 20. この顛末はベアールの伝記にも記されている（『アンドレ・ブルトン伝』、前掲、p.408）。一部の手書き原稿は、現在 <http://www.andrebretton.fr> で確認できる。
 21. Cf. OCIII, p. 1228, n.1.Rémy Laville, *op.cit.*, p. 91, n. 205.
 22. *Ibid.*, p. 57.
 23. OC IV (2008), p. 1000.
 24. Emmanuel Loyer, *op.cit.*, p. 151. これは「時の流れ Le fil du temps」というテキストである可能性があり、現在分析中である。テキストは web 上で参照可能。 <http://www.andrebretton.fr>
 25. アンリ・ベアール著、前掲書、p. 410.
 26. 山中散生による「あとがき」を参照（『驚異の鏡』、前掲書、p. 431）。

27. Rémy Laville, *op.cit.*, pp. 30-31. 妻ジャンヌによれば、マビーユは1936年から39年まで *Le Merle Blanc, siffle et persifle le Samedi* という風刺新聞に記事を書いていたそうだが、ラヴィーユも筆者も確認できなかった。Cf. *Ibid.*, p. 103.